

(その2) 空間的考察

○*萩原美智子 北浦かほる** 増田宏美***

(*大手前女子短大, **大阪市大, ***大阪市大・院)

1はじめに 子育て環境の変化を背景に在宅児も含めた支援の充実が求められ、対策の一つとして多様なサービスを提供できる多機能保育所等の整備計画がある。現在行われている支援活動の空間利用の実態から、子育て支援活動に求められる空間のあり方を探りたい。

2調査概要 その1で述べた6カ所の保育園で子育て支援活動の空間利用状況を調べた。

3結果 支援活動には人材だけでなく設備・空間の保障が必要なため、融通をつけやすい大規模園では実施数が多い。学童保育は専用空間を要するが、必要性が高く全園にある。病児や病気明け保育は隔離や設備のある専用空間を要し、人材の問題があるため実施園は少なく、あっても病院関係者など条件付きである。一時保育は常時20人弱の利用がある所は専用だが、利用ピークがずれる夜間保育と合同で行われている。他は使用時間が限られるため、大規模園では時間差利用で対応していた。小規模園では電話相談や園外活動など空間を要しない活動で、地域との交流を計っている。専用空間を多く持つ園は、部屋の独立性が高く配置が適切でないため空き時間を有効に利用できない上、本来の保育空間にしわ寄せがみられた。保険室的な空間は必須であるが事務室などで対応されており問題点が多い。目的に応じたセッティングを充実させる為にも、時間差や人を有効活用できるキャパシティの大きい空間が必要である。